

Title	日本考古學(後藤守一著, 四海書房發行)
Sub Title	
Author	武田, 勝藏(Takeda, Katsuzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1928
Jtitle	史学 Vol.7, No.1 (1928. 3) ,p.143- 147
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19280300-0149">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19280300-0149</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

公益法人育徳財團が前田家尊經閣所藏の稀觀本を續々複製せられることは、獨り前田家にとつてのみならず、我學界にとつて大いなる慶事と考へる。由來個人の藏書を閱覽するに要する幾多の手数に我等が常に味ふ一つの苦痛であるが、育徳財團がその豊富なる實力により、我等が容易に窺ひ難き尊經閣の秘本をコロタイプ版により原本を摹寫せしめる程度にまで複製せられる點に對し、我等は感謝の辭を吝しまざる者である。

今回出版せられた枕草紙の古鈔本は、「はるはあけほの」巻「一冊」「正月一日の巻」二冊、「小白河の巻」一冊、「めてたき物の巻」一冊、都合四冊で、製本も原本通り即ち胡蝶装で、文字も原本通り一紙兩面に印刷されてゐる。書體だけを見ても直ちに鎌倉時代の古鈔本と點頭せられる。

枕草紙には原本が多い、それを系統によつて區別すると、第一が北村季吟の春曙抄の系統のもの、第二が耆及愚翁校勘の奥書ある三卷本の系統のもの、第三が群書類從所收の宸翰本の系統のものとなる。此の三系統の相違は章段の順序と本文の字句の異同によることはいふまでもないが、前田本は以上三系統の中どれにも屬しない全くの異本である所に、此の本の價值を認め得る譯である。由來本文校正(Text critic)は、文學といはず史學といはず、根本的研究にとつては最初の必要條件であるのに、動もすれば閑却せられる。閑却せられないまでも、單に多くの異本を集めて校勘するを以て足れりとし、對校した異本の部數を以て誇る傾がある。然しながら同一系統に屬する本を何十部あつめて校勘した所で、それは徒勞に過ぎない。異本を分類して系統を作り、異つ

た系統の中の最も善き本を集めて彼此對校するのが、本文校正の本旨である。從來の三系統の何れにも屬せざる前田家本の枕草紙が刊行せられたことは、同書研究者にとつて大なる幸福であると信ずる。

以上の外に育徳財團は前田家所藏の枕草紙の殘缺本で、表紙に「四季物語歎之由ノ書」と題するものを、縮尺してコロタイプ版に附せられ、又前記の四冊とこの殘缺本の本文とを活字に印刷し、「前田本まぐらの草子」と題し、瀟洒なる裝釘を加へて出版せられた。用意周到といふべきである。

本刊行物に先ち、同團は「重廣會史」上帙十冊を複製頒布せられたが、之は下帙の刊行をまつて紹介したいと思ふ。(幸田成友)

## 日本考古學

(後藤守一著  
四海屋發行)

輒近、我が考古學研究の進展は學界に於ける顯著なるもの、一で、これは各地に於ける郷土史の研究と、朝鮮に於ける斯界の開拓の賜物であらう。隨つて新獲の資料に因つて舊說中訂正され、或はさるべきものも一二でない。従つてこれ等調査研究の部分的のもの、上梓は尠くないが、その全般を概見し得べきものは、この十年間に未だ公刊せられず、斯學に伍する吾等の常に遺憾とするところであつた。然るに今次、帝室博物館監査官として、且つ斯界の新進學者として周知の著者は多年研究の一端を發表せられた『日本考古學』を公刊し、幸に吾等多年の渴望を醫せしめられたのは誠に欣喜に耐へず、學界の爲め慶賀の辭を捧ぐべきである。

本書は序説・先史時代・原史時代・考古學研究法の四編に大別し、その序説を、考古學の目的と範圍・考古學的資料の性質・日本考古學の時代的區分の三章に、先史・原史・兩時代を何れも、序説・遺物・遺蹟・餘説の四章に、考古學研究法を資料の蒐集・調査・研究の三章に各分ち、説述極めて平易なる近來の快著である。

次に内容の幾分を紹介して著者の勞に報い度いと思ふ。

著者は先づ卷初(第一編序説)に、考古學の定義と其の研究範圍とに就いて左の如く述べて居る。

考古學とは主として遺物遺蹟によつて古代の文化を研究する學である。その研究の直接對象は主として遺物遺蹟の如き物質的資料、即ち過去人類の殘せる一切の空間的延長を有する物件を指すものであつて、史學が主として取扱ふところの文獻的資料と對するものである。既に資料がかくの如きものである以上、その研究せらるべきものは風俗・制度・文物・技能等の文化事象であつて、直接にこれにのみよつて政治史・經濟史等の研究を試みようとしてはいけない。また一般史學が過去の一切を究めようとしてゐるが如くに、考古學も廣義に人類過去一切を對象とすべきであるが、その最も力を盡すべき領域は、文獻的資料の缺乏してゐる古代であるべきである。……考古學者の専ら活動すべき舞臺は人類の物質的遺物が豊富にあり、しかも同時代の文獻の殆んどない時代の研究であるべきである。云云

第二編先史時代に於ては、先史時代と石器時代とは必しも常に同義語とはならないが、我が國では大體に先史時代の文化は石器時代であると見てもよい國の一であらう。又歐洲の如く舊石器時

代は存在せず新石器時代のみであつたとされて、この遺蹟は其の殆んど總べてが聚落關係の遺蹟で、從來之を遺物包含地・遺物散布地・貝塚・住居址及び墓地等に分け居り、又各種遺蹟より發見の遺物は長年月間に朽腐もせずして形を今日に残したものとみて、これを原料より見れば、石製・土製が甚多て且つ普遍的で骨・角・貝の製、稀には木製のものも發見せられ、其用途より見れば、利器・家什・身體裝飾品・宗教關係品・娛樂品等に、分けられるであらうと述べ、如上遺蹟遺物の一つにつき例證を掲げ且つは押入の寫眞・實測圖等に因つて詳説して居る。

猶、遺物中斯學の宿題なる繩文式と彌生式との再土器の相互關係に就いては左の如く説き結論を急ぐ要はないと述べて居る。

つまり兩様式の土器の系統論になると、綜合研究の見るべきものない今日では定説として認められるものがないといつてよい。其の分布からいへば繩文式土器は第二次的であり彌生式土器は第一次的である。又備中津雲薩摩指宿などの遺物包含層に於ては、繩文式土器が彌生式土器層よりも下層から發見せられてそこに年代の順序を示すものがあり、焼成技術より見ても彌生式の方が年代の降るものであることが認められてゐる以上は、同じく石器時代の土器であり、一部に同時代のものはあるとしても相對的年代に於ては順序があるべきであることは認められるのである。隨つて土器系統論は、兩者を同一系統に於いて繩文式土器より彌生式土器に移行したと見るものと、内地に行はれた先後はあるとしても、兩系統並存と考へるものとが出来るし、一系統論にも移行の動機を外より求めて文化の影響に

よると説くものに内に求めて繩文式土器が、進化の順序につれて彌生式となつたと説くものがあるのである。かく甲乙全く相異せる説の生じて来たのも、共に綜合的研究の不十分の爲めであるから、彌生式土器に對する概念が整頓せられず繩文式土器の相對年代にも考究の餘地のある今日さまで結論に急ぐ必要はないとはいへ兩式は分布に於て相一致せぬものがあり、かつ單に文様といはず形に於ては著しい本質の差異のあることは兩系論者の強味といふべきであらう。

猶、本編の餘説に於ける各節(一)先史時代人の日常生活に衣食住を述べ、(二)同時代の宗教に、死體の埋葬・抱石葬・積石葬よりして死者の靈の再歸迷奔に對する恐怖の念を、又巨嶽火山、猛獸毒蛇に對する崇怖の念より一種の崇物思想の存在を想像し得ると。

又著者は土偶土版の神像説・石棒による陽物崇拜説には餘り賛成して居らぬ様である。(三)同時代の文化に於て、文化の地方相の研究は遺蹟遺物に對して完全なる綜合的研究が遂行せられた後に於てのみこれを説くことが出来、未だ其の緒についた許りの今日では殆んど假説を得るに過ぎない。(四)同時代の年代に於て、先史時代は原史時代と相連なるものであるとすれば、その下限の年代は之を推定する事が出来るも、それより遡つた年代は、これが絕對年數を以て表すことは恐らく將來とても不可能と思はれるから、この時代の年數はあのペトリイ氏が埃及に於て用ひた假數年代を定める様に努むべきであらう。(五)同時代の民族論に、先史時代民族を先住民族と呼ぶことは、第一に違ひ可きて、同時代民族を決定すべき鍵は文化の變遷を考究する以上に出ることを許さ

れない考古學者の手に屬すべきでなく、同時代人の骨に就て正確なる判斷を下すべき人類學者の研究の結果に待つべきである。併し其の文化の變遷に於ても、それに民族性の反響ともいふべきものを認められるとすれば、其の本質的變化的の有無を考究することによつて人類學者の參考となり得るものを提供し得られると述べて居る。

第三編原史時代に於て、同時代は大體、古墳時代で、文化的に云へば鐵器時代を主とし、これに石器より鐵器に移行する過度時代なる金石併用時代をも含める。猶この時代の黎明期に青銅製の利器の使用を認めるが、これを取出して青銅時代を設ける必要は無い。我が原史時代の開扉期は上限を西紀一二世紀前後に比定し恰も半島に於ては支那文化の東漸に因つて樂浪文化が顯著なる時期で、これを接受して我が文化は一轉機を生じて、石器が銅鐵に代つたと見るべきで、又下限に比定すべき時代は飛鳥時代あたりを以てすべきで、彼の六期時代と等うするものである。と述べて居る。同時代の遺蹟には古墳の外に、住居址・城塞址・攻玉・製陶・鑄金等の工業址、竝に祭祀址があり、又遺物は大多數は古墳出土のものて其の用途によつて武器・武裝・服飾・家什・農具・家屋・祭器等に分け、又質によつて金屬・石・木・土等の製品に分類し得と述べ、これ等に就いては先史時代と同様に詳述してある。

猶同時代の埴輪に就ては、圓筒・人馬・家の三種は各起源を異にし、圓筒は古墳の境界を劃する爲めて、木構或は護石の類と同意義であり、人馬は支那に於ける殉死代用の意義を有する石人・石馬の思想を受け、後には彼れを離れて發達變遷して、土偶は侍人て

なく墳墓の主其人であることもある。又家は一種の祀堂或は靈の宿るところとして後世の神社の源流となるべきであると述べ、又日本特有の形とされてゐる前方後圓墳に就ては、前方部祭壇附加説に賛して、支那に於ける王陵前の廣い祭場を模倣したもので前方部に陪葬のあるが如きは祭壇としての意義を失はれた結果と解してもよいと説いて居る。

次に銅鐵に就いては、其の概念だけを大陸より受得し、形に於ては日本獨特の發達を遂げたものであらう。銅鉾に就ては、我國のもの、起源は支那にあり、其の實用年代が漢代にあるとすればその發見地の分布はやがて漢代文化の浸潤を具象すると云へ、其の古式のもの四紀前一二世紀の交に、退化型のもの降つて古噴完成期頃迄に及んだであらう。又銅劍は平形の如く日本特有の様式のものもあるが、有柄式・細形銅劍の類は大陸よりの舶載か、或は其の仿製である。又其の使用年代は半島及び内地發見のものは前漢代のもので多いと定め、其の發見地の分布によつて漢代殊に前漢文化の浸潤の状態を察知せらる。

又遺蹟より發見の貨幣に就て内地は勿論三國時代の半島に於ても通貨として無く、一の珍奇な舶載品として珍藏せられたに止まつたと思はれ、其の錢文の示す時代が確定し得るものとして、其れのみ因つて其の貨幣發見遺蹟の年代を決定する事は出来ない。次に斯界の一大暗礁とて稱すべき銅鐸に就いては、模倣か創造かは明かでないとしても、著しく日本人の自己を表現し、日本人の作つたものであるとするのが一番穩當な考らしく、其の用途は不明で、有意的の地下埋藏狀より推定して、何か上代人の

祭祀に關係ある遺物と想像しておかうと。

本編の餘説には原史時代人の生活、工藝、文化に就て説述し、其の文化に於て、同時代は外來文化が驚くべき程度に咀嚼、同化せられて、こゝに渾然たる日本独自の文化を形成し、鏡に於ては日本製が著しく多く、遂には狩獵文鏡・家屋文鏡の如き純日本鏡を作成し、大刀に於ても頭椎大刀、倒卵形鐔に獨特の發達を見、以て日本刀を産むの素地を礎づけてゐるし、又獸牙から形を知得したといふ勾玉と共に、吾々は遼勁にして優婉なる趣をこれより掬するを得る。かくして鏡、劍、玉の三種が我文化の特質を具象すると云ふても決して誇張の言てはあるまい。

第四編考古學研究法に於ては資料の蒐集・調査・研究を詳述し、讀者の指導となる處甚多で、殊に研究の條に於て原史時代の研究にあつては文献的資料の排斥輕視を戒め、其の嚴密な批判を必要とし、若し文献遺物の衝突に於ては、孰れかに誤謬あるを意味すれば、徒に文献の信ず可らざるを論せず、熟慮三省常に謙抑の態度を保つて結論に幾何かのユトリを置き、正しき判斷を後日に求むべきであると戒飭してゐる。

以上は本書讀了後記憶に存するもの、若干を摘録したもので、他に特筆すべきものあるは云ふ迄も無い。最後に本書によりて啓發せられる處の多かつた筆者は著者の勞に對して深く敬謝の意を表示し、斯界最近に於ける無二の良書として江湖に一讀を薦むるを辭せない。猶、本書は鮮明な挿繪圖百餘に達して讀者の參考なる處甚大である。

猶著者は本年、帝室より考古學資料及之に關する事業並歴史博

博物館の施設研究の爲め印度・希臘・伊・獨・佛・英・米國に巡視を命ぜられて、近日發途に就かれるが、行中無恙、充分に視察あつて、帝室に對しては勿論のこと、學界に多大の新收を齎せられむ事を切望して擲筆する次第である。(昭和二、十二、一夜、武田勝藏)

## 日葡交通の起原 (日葡協會編)

(種子島建碑紀念發行パンフレット)

歐人の所謂『日本の發見』者の榮譽を擔ふものは云ふまでもなく、西洋近世史の初期に當つて、最も活躍せし葡萄牙人である。

かの葡人渡來して凡そ一百年間、宗教上の禍を以て追放の厄にあふまで、精神、物質兩方面に於て我が國人に與へし刺戟、影響の大なりしことは、今更言を俟たず、其の國交斷絶後と雖も、陰然一勢力をなし、此の間の消息を具さにかがうなら、寧ろ思ひ半ばに過ぐるものがあるであらう。

輒近南蠻、切支丹、和蘭陀等凡そこと異國に關するもろくの史話頓に流行し、従つて日葡關係の史實に注意を向くる者亦少くない。時宛も昨年十一月、日葡協會の發起により、葡人初めて上陸せる種子島種子村大字西の表に『日葡親交紀念之碑』が新たに建立せられ、之が機會に、日葡兩國關係の起原を明かにして以て、世の注意を促さんとして上梓されたのが本書である。四六版約百五十頁。『日葡親交紀念之碑』並びに其の碑文『種子島所傳の鐵砲』『慶安二年中野道伴刊行の「南浦文集」』『フェルナン・メンデス・ピントの「巡廻記」初版の扉』(以上寫眞版)と十五・六世紀に於けるポルトガルの勢力圖及び薩南諸島の地圖(以上凸版)二葉が添へてあ

る。

冒頭、駐日葡國公使ジョゼ・ダ・コスタ・カルネイロ氏の Resumo Cronologico dos Descobrimentos Portugueses と題する葡文約四十頁にわたる序文あり次に山口鐵次郎の手になれる右の譯文(自由譯と私は感じた)を添へてある。簡單ながら近世葡萄牙の發見事業の一般を知り得て面白く、殊にお國柄の人の筆になることとして興趣は一段と深い。かくて本文たる岡本真知氏の『ポルトガル人種子島漂着の事實』(一八七二頁)之に續き、附録として『主要なるポルトガルの航海者』『門倉崎の鐵砲傳來紀功碑文』『ポルトガル人種子島初來に關する資料』が加へられてゐる。

岡本氏は葡語に精通してゐられ、日葡關係の史實に明るく、又葡萄牙國に於ける此の方面の研究は之をひろく涉獵してゐられるものゝ如くである。

氏は先づ本題に入るに先だち葡人漂着の舞臺と背景とに供せんが爲、比較的多くの頁を『ポルトガル人東航の始め』『日本及び支那の國情』『極東海上の有様』『ポルトガル人の支那進出』『種子島の事情』にさかれた。本論に入つては葡人漂着に關する左の六記録即ち一、文之の『鐵砲記』二、ピントの『巡廻記』三、ガルマンの『諸國發見誌』四、コウトの『アデア十篇史』五、エスカランテの『報告』並びに、六、アッシュエダ舊王城圖書館藏未刊『日本教會史』を擧げて比較検討され次の結論に達せられた。

(一)記録として比較的信用し得られるガルマン、コウト、エスカランテ、「日本教會史」の著者の記述によつて、アントニョ・ダ・モッタ、フランシスコ・セイモト、アントニョ・ヘイショットの三人